関西スクエア賞・京都の通崎睦美さん（マリンバ・木琴奏者）

木琴 先駆者への敬意

平岡養一の業績 米紙評論やレコード集め執筆

通崎睦美さん。漆和紙の壁を背に＝京都市下京区、戸村登撮影

アンティークの着物をたしなみ、古い長屋を大胆に改築。地元・京都で粋に暮らすマリンバ・木琴奏者の通崎睦美さん(46)が、第6回「朝日21関西スクエア賞」に決まった。近ごろは、木琴奏者の草分け的存在だった平岡養一（1907～81）の研究にのめり込んでいる。

リノベーション

「天使突抜1丁目」。うそのような、本当の住所地に、その長屋はある。

渋みのある黒い外壁。腰をかがめ、高さ1㍍ほどの狭い木戸をがらりと開けると、空間はわずか10坪ほど。壁紙は、和紙を漆で染めた漆和紙で、独特のぬくもりを醸し出す。階段は幅広でゆったり。あか抜けている。

崩れそうな家だった。風呂もない。「銭湯文化が根付いていたんですね。階段は新しく作りました」と通崎さん。

大胆なリノベーションは2010年、およそ1年かけた。担ったのは母校の京都市立芸術大のアーティスト仲間たち。1枚330円の手すきの和紙を1枚ずつ、根気よく貼り付けた。漆にひどくかぶれながら。2階にも壁一面に漆和紙、反対側には古ダンスがびっしりと並ぶ。中には大正時代から昭和初期の着物や帯約600点。20代後半から、夢中になって集めた品々だ。

よく勘違いされるが、着物でマリンバや木琴を弾くわけではない。演奏はあくまでも洋服で。「でも古い着物に親しんでいたから、平岡さんの古い木琴に魅力を感じることができた」

10歳の時に共演

平岡との縁は2005年、彼の愛用していた楽器で木琴協奏曲を弾く機会を得てからだ。それまでにも、10歳の時に共演した。といっても平岡が70歳の時の演奏会の一コマだ。「元気よく弾いてるなあ」という印象だけが残っている。

平岡について、まとまった文献はほとんどない。米国の新聞社の過去記事をあさり、絶賛評の数々を手に入れた。海外のネットオークションでもレコードを集めた。

そして書き上げたのが、ノンフィクション「木琴デイズ―平岡養一『天衣無縫の音楽人生』」（講談社）。挫折を味わうニューヨーク時代。称賛までの道のり。真珠湾攻撃で在米日本人に広がった動揺などが、生き生きと描かれる。

「私自身、マリンバばかり弾いてきた。フィギュアスケートでいえば4、5回転ジャンプの成功にこだわっていた。平岡さんは日本で初めてスケート靴を履いたとか、初めてジャンプをしたような存在。多くの人に知ってほしい」

◇

「木琴デイズ」を音でたどる演奏会が5月29日、京都府京都文化博物館別館ホールである。エネスク「ルーマニア狂詩曲第1番」など。平岡のレコードも聴く。ピアノ松園洋二。当日4千円。otonowa（075・252・8255）。

（谷辺晃子）

ひらおか・よういち

木琴を独学し、慶応大卒業後、22歳で渡米。ソロ奏者として高く評価されて、NBCと専属契約。1931年3月から10年9カ月間、日曜を除く毎朝、ラジオの生番組で木琴を弾いた。第2次世界大戦が始まり、帰国。国内でも最後まで木琴一筋。楽器は特注した米ディーガン社の1935年製。

平岡養一が愛用した4オクターブ半の木琴（平野愛氏撮影）

■朝日21関西スクエア賞を受賞した方々
（敬称略、肩書はすべて当時、写真は左から順に第1回受賞者から）

第1回	神谷之康（脳科学者）／竹下・ルッジェリ・アンナ（宗教学者）
第2回	高橋智隆（ロボットクリエーター）
第3回	西光慎治（奈良県明日香村教委主任技師）
第4回	山田真澄（京都大防災研究所助教）
第5回	上田假奈代（詩人、釜ケ崎芸術大創設者）